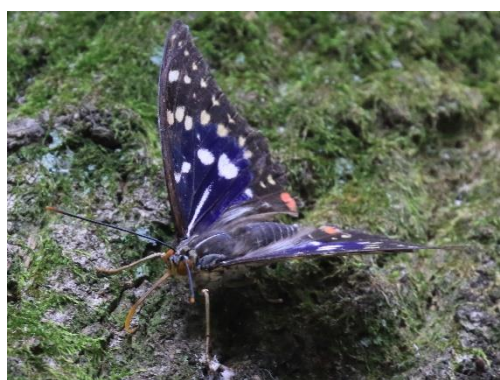




愛川ふれあいの村 今月の風景

2020年8月 自然のたより

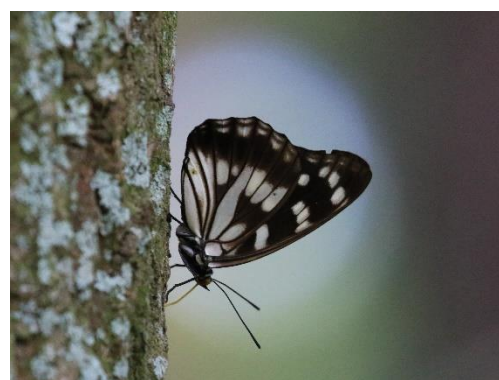
梅雨の長雨の影響か、村のクヌギとコナラからは樹液が出ていました。どんな罠を仕掛けても樹液には敵わず、たくさんの昆虫を引き寄せていました。その中には、例年あまり姿を現さなかった“タテハチョウの仲間たち”。視線を落とせば、“ミョウガ”や“ニラ”の花が咲いています。猛暑で天気が不安定となり、突然の大雨が…しかし、雨があがるとそこには虹が出ていました。利用が段階的に始まった8月。活動の合間に村に広がる豊かな自然に目を向けてみてはいかがでしょうか。(石川)



オオムラサキ



スミナガシ



ゴマダラチョウ



カブトムシ



ミヤマクワガタ



ノキリクガタとオオムラサキ



ウスバキトンボ



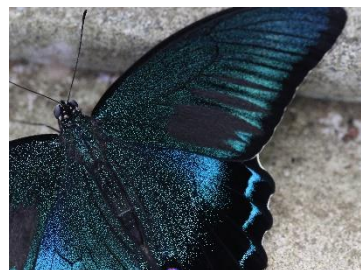
サネカズラ



コジュケイのお散歩



キツネノカミソリ



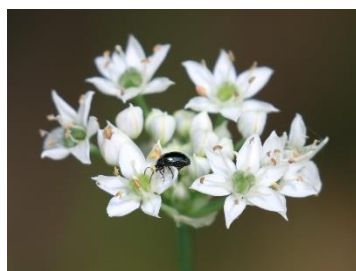
ミヤマカラスアゲハ



2重の虹



仮面をつけたクワガタ



ニラ



ミョウガ

トピックス ★ヒル（蛭）★

私は、蛭に好まれる体質のようで、毎年数回血液を提供するはめになっています。今年もすでに6回吸われています。だけど蛭は蚊ほどいやではありません。なぜなら痛くも痒くもないからです。

ですが…村を利用する学校の先生方から「蛭はいますか？」という問い合わせが必ずあるのです。背景に「居るといやだな」という思いがあるのでしょうか。これはいったいなぜなのでしょう。

私の住んでいる綾瀬市の中央を流れている川の名が“比留川”です。地元の年配者の体験談に、川に蛭がいっぱい居たとのこと。比留川は“蛭川”が元の名前だろうと思います。そして川の流域に『比留川』という姓の人達が多数いらっしゃいます。室町時代から繁栄した一族です。『ひる』の名を誇りにしている人々です。

一方、明治時代の小説『高野聖』（こうやひじり＝泉鏡花・作）は、僧侶が山中で山蛭に襲われ、木の枝からぼたぼたと落ちてきて、体中に吸い付かれた様子をおどろおどろしく書いています。

この名作が、多くの人々に蛭の印象を悪くしてきたのではないかと私は思うのです。

実は、医療や薬用として昔からヒルは人間にとって重宝されてきた歴史があります。悪い血を吸いとらせたり、乾燥したヒルを滋養強壯の生薬とする漢方など…

綾瀬市の比留川一族が『ひる』の名を誇りにしているのも納得できますね。（河野）



生き物 ★ヒグラシ★

8月の暑さに拍車をかけるように鳴くセミ。そんな中、ヒグラシは美しい声で夕暮れを知らせてくれる。日が沈むころの薄暗いときに合唱が始まり、なんとなく物悲しさを感じさせる。

秋の季語にもなっているヒグラシ。暦の上ではもう秋だが、今年の夏はまだ暑い日が続いている。この暑さの中、ヒグラシの「カナカナカナ」という鳴き声は清涼感にあふれる。どこからか吹き抜ける風と、その風に乗ってきた蚊取り線香の匂いが、ヒグラシの鳴き声と共に夏の思い出に変わる。

この暑さが早く終わってほしいような、終わってしまうのが寂しいような。ヒグラシにはそんなことを考えさせられる。（住友）



旬 ★紫蘇★

紫蘇は、日本のハーブとして古くから刺身のツマや薬味として親しまれてきました。

脇役として大活躍の紫蘇（青じそ）ですが、とても栄養が豊富でカロテン・ビタミン B2・カルシウムの量は、野菜の中でもトップクラスです。香りには、抗菌作用と防腐作用がある為、食中毒を予防する働きを持っています。そのため、紫蘇を夏に食べる事は、理にかなってます。

ところで、スーパーマーケットでよく見かける『大葉』は紫蘇の葉に良く似ていませんか？

実は、同じものなのです。紫蘇を出荷する時、『花穂』と『葉』の区別をするために大きな葉っぱという意味で『大葉』という商品名がついたそうです。葉の形状のまま香味野菜として使用する場合のみ、大葉と呼ぶそうです。（菅原）



シモバシラ咲く 来月の見どころ

シモバシラは、山地の木陰に生える多年草でふれあいの村から高取山や仏果山へ行く山道に良く生育している。高さ四十センチほどで葉は対生し、シロ科特有の茎は四角形をしていて細い茎にしてはとても丈夫である。茎の上部の葉のわきから総状花序の白い花を片側だけに咲かせるのも面白い特色である。あまり目立たないが、シソの花に似た花で、香りも良くチヨウやハチが頻繁に訪れ吸蜜をしている。

シモバシラは、ふれあいの村にも生えているが、晴れた冬の寒い朝に野草園に行くと、運が良ければ見事な氷の華を見ることが出来る。それはシモバシラの葉や茎は、冬が近づくと枯れてしまうが、根はその後もしばらく活動を続け枯れた茎の道管に水が吸い上げられていく。その水分は、朝の気温が氷点下になると四角い茎を破って霜柱（氷の華）ができるのである。シモバシラの名はこのこと由来している。今年の夏は、野草園のヤマユリやカノコユリは鹿や猪に食べられてしまったが、シモバシラは茎が固いため食べられずに残っている。元気なシモバシラの花を是非見たい。いらしてください。（吉田）

